

## 雷鳴抄

2015.6.1

だれでもかかる可能性があるがん。医療の進歩で治療する確率が格段に上がった。とはいえ、宣告さ

れればどうしても死を意識せざるをえない。当然、悩みも抱える▼医療現場は病状や治療の説明だけで手いっぱい。がん患者や家族らの精神的苦痛を和らげるまでではできない。そんな現実を何とかしよう、医療と患者の隙間を埋めようと順天堂大の樋野興夫教授が始めたのが「がん哲学外来」だ▼その趣旨に共鳴し、2年前に「まちなかメディアカルカフェin宇都宮」が発足した。代表の梶立がんセンター医師、平林かおるさんは自身がんの経験者でもある▼医師

や看護師などの医療専門家が、患者や家族らと同じ目線で治療面から生活や経済的な問題まで気軽に相談に応じる。深刻な面持ちの患者が相談を終えるころには明るい表情に。何度も参加する男性は「元気を頂き、元気を差し上げたい」▼月に1度の会合は、宇都宮市のオリオン通りにある「下野新聞NEWS CAFE」が会場だ。「広すぎず狭すぎず、アットホームな感じがうってつけ」と主催者は言う▼小社と読者の交流の拠点に、と誕生したCAFEは1日で3周年を迎える。この日は137回目の創刊記念日でもある。手前みそだが、地域密着をうたう新聞にふさわしく多少は地域に根付きつつあるのではないか。